UIFA JAPON NEWSLETTER

NO.61 Nov. 25, 2004

■主な内容

UIFA 第14回大会を振り返って　小川信子・松川淳子
UIFA 世界大会で出会った、各国の女性建築家　谷村留都
トゥールーズで感じた、海外女性建築家たちの情熱　吉田洋子
UIFA：楽しかったポストコングレスツアー　小渡佳代子
アフター・ポストコングレスのスウェーデン行雑感　正宗量子
中村陽子さんを偲ぶ
役員会報告
編集後記

UIFA 第14回大会を振り返って

小川 信子・松川 淳子

参加国約20カ国、参加者約80名、５日間にわたる大会は、歓迎パーティーの翌９月２日、トゥールーズの国際会議場の一隅で正式会議の幕を開けた。日本からの参加者は、18名。国単位でみると、参加者数は一番多かったと思う。開会式の壇上には、ソランジュ会長を真ん中に、UIAの事務局長リゲ氏、建築家協会代表スッシーニ氏、ミディ・ピレネ地方局長マルヴォイ氏、フランス建築家保証協会代表ペロール氏、トゥールーズ市を代表してフランソワーズ・ドゥ・ヴェリナス氏、ほかにドイツ、ハンガリー、アメリカ、日本など、UIFAの幹事国の会長たちが顔を揃えた。それぞれの心のこもったご挨拶や女性建築家に対するエールのあと、この会場「ピエール・ボーディス会議センター」の協働設計者であるニコル・ルピアックさんから設計趣旨や会議場の説明があった。

今回の全体テーマは、①女性建築家の現状、②女性建築家が社会的認知を得るまで、③自然災害における女性建築家の役割、の３本だった。③がこの大会の特別テーマとして立てられたものである。このテーマを日本から提案した松川の立場からすると、そもそも開催地をイスタンブールと想定しての提案だったから、トゥールーズ開催が決まった時、テーマの撤回も申し入れたのだが「こういうテーマこそ、今、大事だから」というソランジュさんの意見でそのままになった経緯があり、「地震国」以外の国々、ことにヨーロッパの国々に関心があるだろうか、発表が集まるだろうかと、心配だったが、それは杞憂だった。ヨーロッパを襲った洪水について、アフガニスタンやイランの地震の支援についてなど、興味深い発表があり、なかでも、エマージェンシーアーキテクトの活躍に関するフランス勢６人を揃えた発表は、ソランジュさんの意気込みを改めて感じさせるものだった。発表タイトル数は合計約23、日本からは、UIFA JAPON 10周年記念のCDによる発表「女性建築家たちの現在・過去・未来－UIFA JAPON 10年のあゆみを振り返りながら―」、中野による「家族が生き残るための共同作戦―保険か疎開か」、松川による「世界の震災復興活動に学びながら」の計３題が発表された。

展示テーマは自由だから、作品、女性建築家の現状など、いろいろな主題があったが、出展数はいつもよりやや少なかった。正確な数字が不明だが20点くらいだったろうか。日本のパネルは、石川（弥）、稲垣（弘）、小渡、中野、正宗、松川の５点と、千代田区男女共同参画センター５周年のために利用団体として制作（担当：板東）したUIFA JAPONのパネルがロビーに展示され、松川が持参した仮設市街地研究会による「20世紀の世界の震災」パネル16枚は、発表の行われたホールの中に展示され、参加者の関心を集めた。

毎回事務局会議の中で行われる総括と次回開催国の仮決定は、今回、ソランジュさんの提案で、全員参加で行われた。総括宣言に対する意見、次回開催国に関する意見など、いつもの事務局会議とひと味異なり、活発な意見交換があった。次回開催国は、一応このとき賛同が一番多かった「カナリア諸島（スペイン）」ということになっている。

閉会式はいつもよりカジュアルなスタイルで行われたが、ソランジュ会長から「重要なことがある」との前置きがあって、「今後、日本がUIFAの事務局を引き受けてくれないか」という提案が出された。その理由として、会長は、UIFAの第１回会議に中原暢子（現UIFA JAPON名誉会長）が出席し、その後も世界大会に出席していること、組織がきちんとしていることなどをあげていらした。この発言には一瞬とまどったが「サポートは出来る限りするが、引き続きフランスに本部を置いてほしい」と返礼の挨拶をし、その件はそのままおさまった。今後ソランジュ会長をサポートする良い方法を確立していきたいものである。

UIFA世界大会で出会った、各国の女性建築家

谷村 留都

２度目の大会参加は顔見知りも増え少し余裕を持って臨むことができました。発表の中で特に印象に残った３人について私が興味を持ったことの感想です。

アメリカのＩＡＷＡの紹介をされたDunayさんは以前から評判を聞いていました。今回は日本語の同時通訳がなく、すべて英語で聞かなければならないので、どうなるかと心配でしたが、ゆっくり，はっきりした丁寧なしゃべり方でよく解りました。大学で基本をきちんと教えている方だけのことはあると感心しました。ついつい早口になり、不明瞭で自己満足的な話し方になりがちな私にはよいお手本です。言語の種類に関係なく彼女のように話せるといいなと思いました。

会議の前のダンス（撮影：谷村）

デンマークのAliceさんは前回も発表されましたし、デンマークの建築にとても興味があるので今回は事前にパネルも見て準備を整えておきました。マッチ箱が単純に並んだ機能的だけど面白みに欠ける60年代の集合住宅のアプローチ、エントランス、外観のリニューアルが主な内容でした。アプローチは人や自転車などの動きを観察し卵型のコモンエリアを各入口と通路の間に貫入させ、通りやすくするだけでなく人々のたまるスペースを確保するというものでした。ゆで卵を縦半分に切ったような形で、黄身の部分をタイル張りに、残りの白身の部分を芝生にし、材質の違いで用途を変えていました。エントランス部分は三角の屋根をつけ外壁にはレンガなどナチュラルで有機的な素材を張り、外観全体とあわせてデンマークの伝統的なスタイルにまとめてありました。Aliceさんにはその後のパーティ会場でも話をする機会があり、国際会議に参加したことを実感しました。デンマークの高齢者対策など聞きたいことは山ほどありますが、貧しい語学力で思うようにいかないのが残念でした。

デンマークのアリスさん
（撮影：谷村）

イスラエルのOronさんは担当された沢山の作品の発表でした。素材や色のコントラスト、壁を強調した幾何学的な形態など、とても大胆な作品でした。ただそれらは一昔前にはやったポストモダン建築の流れをくんだデザインのようでもあります。それらのデザインと今回のテーマである女性建築家の役割について、少し強引に結びつけている点が疑問でした。スタッフの一員としてどういう役割を果たし、またどの部分に女性らしさを発揮したのかということを聞けなかったのが残念です。

全体を通じて言えるのは、言葉は通じなくてもその人の考え方は解るなということです。今回のUIFAフランス大会に出席したからといって、即座に世界の状況はわからないけれど、日本の建築界の考え方は進んでいるとも感じられました。それなのに街が魅力的ではないのはなぜなのかしら？

トゥールーズで感じた、海外女性建築家たちの情熱

吉田 洋子

UIFA JAPONの日常活動で親しくなったメンバーと皆で行ったわけですのでとても安心して大会に参加できました。又、日本大会をはじめ多くの顔見知りの UIFA メンバーも来ていらしてとてもフレンドリーな大会だったと私は思いました。ド・ラ・トゥールさんのお人柄が、UIFAのこの暖かい雰囲気を創り上げているのだとつくづく感じた大会でした。

しかし、パーティや食事の時などはとても優しい女性建築家の人たちでしたがいざ発表とか、パネルセッションの前での討論とかの時は、皆本当に熱意をもって自分の仕事のことを語ります。とくに印象的だったのは、歴史や文化の伝統といったものを大切にしながら建築デザイン活動を行っていることでした。

会議センターで熱心に発表に聞き入る
UIFAメンバー　（撮影：吉田）

災害に関しては、地球全体の問題なのだと各国のお話を聞いて今さらながら実感いたしました。ヨーロッパの水害もこの夏の暑さも地球問題です。トゥールーズに着いた初めの日は少し秋のような風が吹いていてフランスはやはり涼しいと思ったら、次の日からは又猛暑。昨年に引き続いての暑さなのだそうです。石造りなので中は涼しいということで冷房が入っていない建物が多いそうですが、お年寄りなどは大変なようでした。

もちろん、新聞・テレビなどで見聞きしていることなのですが世界の女性建築家の人たちと直接話すと様々なことが肌で感じ取れます。今後も歴史・文化や気候と建物のことなどについては世界の女性建築家の人たちと話し合いたいテーマだと思いました。今回日本の建築家の人も含めて環境共生の住宅などの発表も多かったことは、とてもよかったと思います。

また、働きながら建築を続けることは子育てとのバランスで大変なのは各国共通で、子育て中はスリムでその後は太ってしまうなんていう冗談も飛びかっていました。

水と緑が印象的なトゥールーズ
のギャロンヌ川（撮影：吉田）

そういう厳しい状況もある中で各国の女性たちが情熱をもって建築の仕事に取り組んでいるパワーをもらって帰ってきました。とても楽しいフランス大会の参加でした。

＜ＵＤ冊子完成のご報告＞

冊子「私にとってのユニバーサルデザイン“Our Views on Universal Design”」が完成し、11月初旬に皆様のお手元へお届けできました。作業を担当した広報委員会（井出幸子、田中厚子、石川和代、須永俶子、中野晶子、渡辺喜代美）に加勢して大高真紀子、平井美蔓、副会長（広報担当）松川淳子氏も応援してくれました。ご感想を寄稿ください。

UIFA：楽しかったポストコングレスツアー

小渡 佳代子

ポストコングレスツアーはバスで南西フランスのカルカッソンヌやアルビ、コルドを旅行しました。

移動の間、バスの中からは、ひまわりやブドウ畑、枝豆等の野菜畑がなだらかな丘のように広がる農業国フランスの風景と、所々にある小さな集落の城跡や教会を見かけました。まるで絵画を見ているような景色です。

古い貴族の家柄の出身で健康を害し母の居城で亡くなったロートレックの美術館からの眺望
（写真：小渡）

トゥールーズをインターネットで検索すると数え切れない教会建築があります。歴史ある町と楽しみにしていたとおり、南西フランスはローマ時代に始まり、ゲルマン民族、十字軍の遠征の影響、14･15世紀の異民族抗争や18世紀までのキリスト教の歴史と自然の文化・西洋建築史を感じるツアーでした。

バス一台に全員が乗れるツアーはとてもフレンドリーな人数です。特に昼食と夕食をワインと共に５時間近く歓談しながら過ごす毎日は、日々時間に追われる仕事や家事等のストレスから解放され、色々な国の建築家と仕事や家庭、子供や親、建築の環境等多くのことを話す機会になりました。ワシントン大会以来、毎回参加する機会に恵まれた私は、UIFAの大会の度にお会いする人が色々な国に出来ました。16年来という方も多く、それぞれの大会での思い出話や、大会に参加されなかった共通の知人の活躍など、話題になったりします。「日本の○○ハウスがヨーロッパに進出してきたがこの住宅をあなたはどう思うか」と聞かれた時は日本人の住宅に対する考え方を聞いているようでもありましたが、同じ意見と分かり大笑いしました。

和やかに会食（写真：小渡）

バス一台と言えば南アフリカ共和国でのポストコングレスツアーは、人里離れた大自然の暗闇の中を約500キロ、５時間近くかけて移動し、闇の中に明かりが見えたときは一斉に歓声と拍手が湧きました。宴会とそれが一週間続いたので同士のような気分になった思い出話の後にそれが11年も昔の話と驚きます。その時、UIFA のメンバーで五ヶ国語を話せるディタさん（今回車椅子を使用された方）が英語･フランス語･スペイン語の通訳をしてくれたのが70才代後半だったと今回知り、又、ツアー中に80歳のお誕生日を迎えられたド・ラ・トゥール会長のエネルギーを思うと、UIFA のツアーに参加すると元気・やる気を先輩から頂き、建築を媒介に色々な話ができる幸せを感じる旅でもありました。

アフター･ポストコングレスのスウェーデン行雑感

正宗 量子

トウルーズでの世界大会、２泊３日のポストコングレスを無事終了した小渡、渡辺と私の３名は、予定通り９月９日の夕方パリからスウェーデン行きの飛行機に乗り込んだ。偶然だったが、小川信子会長と同機だった。

私にとり３度目のスウェーデン行。1996年最初に訪れた時から約８年の歳月が流れたわけだ。当然の事目に映る建物、人の動きや光景が少々違っていた。

初めは何もかもが新鮮で感動的だった。水辺と緑の美しい自然、整然とした街並み。自然条件や歴史､政治的背景､人々の思考回路が随分日本とは違う。特に印象深かったのは、街に大勢のお年寄りが行き交う姿だった。

アフター・ポストコングレスツアーのメンバー
（撮影：正宗）

当時84歳の武田ます先生（現在92歳）がバリアの無い街中をスタスタ歩く街づくりの不思議。地下鉄駅には既にエレベーター。エスカレーターは近づくと動き出し消エネのセンサーが働く。バスでは車椅子の青年が誰の手助けも借りずに一人で乗り降りできる不思議さ。(今では日本中どこでも常識になった低床バス）日本でも最近乗り物にペットが飼い主と同乗する姿を見るが、彼らのマナーのよさも目の当たりにした。でも､悔しかったのは何処に行くにもまだ若かった私は、皆よりすべて高額な運賃やチケット料を払わねばならず、消費税が高い国と知ってはいても早く歳を取りたいと願わしく思ったことを思い出したりした。

今回は、街に若い妊婦が沢山楽しげに外出しているのが目新しく感じた。彼女たちと同数の男性だけで押す乳母車姿もよく見かけた。男性の育児休暇が浸透し、少子化の社会現象から脱出すべく国を挙げての対策が功を奏していた。男女が同じ比率で国会に進出しようと頑張り、女性が本来持つ優しさや繊細さを街づくりの行政に迄生かそうと努力している姿勢が根底にあるのだ。見せ掛けや力みではなく、真の男女共同参画社会を地で行っている。

また、新しい再開発やリノベーションの建築は、パリと同様ガラス張り素材が多く、流行のデザインはここ北欧の地に飛び火しつつあった。これは、古さを尊ぶヨーロッパにも新時代への変遷過程にある状況を物語っているようだ。

９月10日は、スウェーデン福祉研究所企画による日本から８日間で組まれた見学旅行に１日だけ参加した。小川会長の「グループホームと小規模多機能施設」のレクチャーと見学会だ。家族は、社会集団の単位であり、居住生活の拠点を何処におき、高齢者にとり個としての居住環境設備の基本はどうあるべきか、幼児施設にしても一人一人の人間としての個として出発しているのに対し、日本の施設では、集団が一緒に走ることが一生懸命やっている事と錯覚している。(次ページへ)

NO.61 Nov. 25, 2004

Union Internationale des Femmes Architectes Japon

UIFA JAPON 事務局
〒102-0083
東京都千代田区麹町２－６－５
麹町 E.C.K.ビル ㈱生活構造研究所内
Phone: 03-5275-7861 Fax: 03-5275-7866
E-mail: uifa@LIQL.CO.JP
発行 2004年11月25日

THE SECRETARIAT OF UIFA JAPON
c/o LABORATORY FOR INNOVATORS
OF QUARITY OF LIFE
DAINI-OSHIDA BLDG.
2-5-4, KOUJIMACHI,CHIYODA-KU
TOKYO, JAPAN 〒102-0083
PHONE :+81-3-5275-7861
FAX :+81-3-5275-7866

この点が違うとの、反省を踏まえてのレクチャーだった。

その後、バスでLignagatan６にあるHormstulls alderboendeと言う痴呆症高齢者のためのグループホーム、ナーシングホーム、サービスハウスやデイケアセンターを持つ多機能の施設を見学した。

以前も確かここを訪れたが、当時より活気に溢れていたことは嬉しい。病院再利用の建物で、痴呆者の２室を見学できた。まるで１軒家に住んでいるような、これまで住んでいる部屋との連続性を感じる。カーテンや家具、ミニキッチンなどの設備がインテリアに溶け込み、日本のように手すりや介護機器だけが目に飛び込む部屋とは全く違う。家族の写真を飾り、部屋にはさりげなく住み手の教養、趣味やその人の歴史さえその中に感じるのは何故だろうか。

インテリアが美しい食堂や、窓辺からさりげなく映る美しい景色
（撮影：正宗）

サービスハウスの広間では、丁度ダンスを楽しんでいた。数十人の男女が楽しげに踊って、熱気すら伝わる。断然女性が多い。女性は積極的に曲が終わると男性に近づき、必ず前に踊っていた女性は引かねばならないと言う暗黙のルールがある。しかし壁の華は、何処の世界でもいるものである。じっと見学していたら、老いた男性が“踊らないか？”と近づいてこられたので、早々に退散した。

広いホールでダンスを楽しんでいるご老人達
（撮影：正宗）

Bolindersplan の Serafene aldreboendeという176名の患者が17のユニットに分かれて暮らすモダンな施設を見学。有意義な１日を終えストックホルムの小川ホテルで、小渡さんと快適な第１夜を過ごさせていただいた。

中村陽子さんを偲ぶ

突然の訃報です。会員中村陽子さんが10月19日所用先の名古屋で交通事故に遭われ、急逝されました。10月27日にお別れの会で、多くの方々が献花しました。穏やかなほほえみを浮かべ、きれいな声で語る中村さんは、幅広い活動をされ、UIFA では、ニューズレターの広報担当として「私にとってのユニバーサルデザイン」の立ち上げに尽力され、日本大会では浅縹（あさはなだ）色の着物姿で清澄庭園でのお茶の接待、また企画「この指とまれ」クロアチアの「セナさんの本」を読む会のメンバーとして活動していらっしゃいました。皆様から追悼の言葉をいただきました。（井出）

□海外の多くの友人に広く愛された中村さん：UIFA 日本大会では、ブラジルのマリア・ダ・シルバさんを中野のご自宅に受け入れ心のこもったお世話をしていた中村さん。魅力あふれる笑顔の持ち主は、海外の多くの友人に広く愛されていました。25年位前、女性建築士の会の発足式にご長男をおんぶして出席されていました。そしてトルコの女性建築家セルマさんの結婚式のため２人でアンカラを訪れたこともありました。仕事・勉強・社会活動にパワフルに取り組み、太く短く駆け抜けてしまわれた中村さん。あなたの存在をカバーできる人は世界中どこにもいません。（寺尾信子）

□第12回日本大会プレス対応：中村さんに頼んだ明日のプレス発表の原稿が気に入らず書き直しを頼んだ翌日の朝のこと。出来ましたとニッコリ差し出したあの笑顔と優しさその責任感。忘れることができません（飯島静江）。

□「セナさんの本」：共に翻訳した「セナさんの本」が一応完成した今年の２月、京橋のクロアチアレストランでメンバー３人でお祝いをしました。その時は「中野の警察大学校の跡地利用問題」の署名用紙を抱えてこられました。私とは中野のまちづくりやバリアフリー住宅などで接点も多く、同士を失った無念さでいっぱいです（東由美子）。読み合わせの会には、図書館で探した重い資料を抱えて参加する私に、「いつも楽しみにしているのよ」と、かならずのように声をかけてくださった穏やかな笑顔が思い出されます（吉村康子）。

□SEE YOU LATER!：必ずどこかで活躍されていると確信させる何かをお持ちの中村さんでした。お嬢さんのあずみさんが言われたように、GOOD－BY！ではなく SEE YOU LATER!と私も言わせていただきます。（板東みさ子）

※中村陽子さんを偲びその夢を語り継ぐ会
12月５日(日) 18:00~20:00 中野サンプラザ11階 皐月の間
会費 5,000円
問い合わせ先：渡辺健男 rug-ken@rd5.so-net.ne.jp

役員会報告
（８月の理事会は休み）
第５回 2004年9月14日（火）
議 事：・各部会報告・トゥールーズ大会の報告と総括。「私にとってのユニバーサルデザイン」小冊子発行延期の報告。
第６回 2004年10月20日（火）
議 事：・各部会報告・次回海外交流の会の企画検討。「私にとってのユニバーサルデザイン」小冊子印刷部数を確定。発行10月28日。

編集後記：気持ちがつながると言語障害が乗り越えられる体験“痴呆と人間の尊厳”についてフランスの参加者とコミュニケーション（渡辺）
スロープの効用は道の掃除にも、ぶどう畑の水はけにも、ポンピドゥ・センターのアプローチにも生かされていました。（中野）
今年の東京は台風の当り年。来るたびにドキドキしてました。（石川）
猛暑・台風・地震・・・イラク情勢・大統領選・・組織的な活動が必要です。（田中）
激せず静かな語り口であんなに説得力のある話し方をされた方が消えてしまいました。（井出）
防災上強い街は公園や街路樹、庭園の緑も豊かで、景観上も美しいと考えています。（須永）